

- 1 . 人が主に穀物のささげ物をささげるときは、ささげ物は小麦粉でなければならない。  
その上に油をそそぎ、その上に乳香を添え、
- 2 . それを祭司であるアロンの子らのところに持って行きなさい。  
祭司はこの中から、  
ひとつかみの小麦粉と、油と、その乳香全部を取り出し、  
それを記念の部分として、祭壇の上で焼いて煙にしなさい。  
これは主へのなだめのかおりの火によるささげ物である。
- 3 . その穀物のささげ物の残りは、アロンとその子らのものとなる。  
それは主への火によるささげ物の最も聖なるものである。
- 4 . あなたがかまどで焼いた穀物のささげ物をささげるときは、  
それは油を混ぜた小麦粉の、種を入れない輪型のパン、  
あるいは油を塗った、種を入れないせんべいでなければならない。
- 5 . また、もしあなたのささげ物が、  
平なべの上で焼いた穀物のささげ物であれば、それは油を混ぜた小麦粉の、種を入れないものでなければならない。  
い。
- 6 . あなたはそれを粉々に砕いて、その上に油をそそぎなさい。  
これは穀物のささげ物である。
- 7 . また、もしあなたのささげ物が、  
なべで作った穀物のささげ物であれば、それは油を混ぜた小麦粉で作らなければならない。
- 8 . こうして、あなたが作った穀物のささげ物を主にささげるときは、  
それを祭司のところに持って来、祭司はそれを祭壇に持って行きなさい。
- 9 . 祭司はその穀物のささげ物から、記念の部分を取り出し、祭壇の上で焼いて煙にしなさい。  
これは主へのなだめのかおりの火によるささげ物である。
- 10 . 穀物のささげ物の残りは、アロンとその子らのものとなる。  
これは主への火によるささげ物の最も聖なるものである。
- 11 . あなたがたが主にささげる穀物のささげ物はみな、パン種を入れて作ってはならない。  
パン種や蜜は、少しでも、主への火によるささげ物として焼いて煙にしてはならないからである。
- 12 . それらは初穂のささげ物として主にささげなければならない。  
しかしそれらをなだめのかおりとして、祭壇の上で焼き尽くしてはならない。
- 13 . あなたの穀物のささげ物にはすべて、塩で味をつけなければならない。  
あなたの穀物のささげ物にあなたの神の契約の塩を欠かしてはならない。  
あなたのささげ物には、いつでも塩を添えてささげなければならない。
- 14 . もしあなたが初穂の穀物のささげ物を主にささげるなら、  
火にあぶった穀粒、新穀のひき割り麦をあなたの初穂の穀物のささげ物としてささげなければならない。
- 15 . あなたはその上に油を加え、その上に乳香を添えなさい。  
これは穀物のささげ物である。
- 16 . 祭司は記念の部分、すなわち、そのひき割り麦の一部とその油の一部、それにその乳香全部を焼いて煙にしなさい。  
い。  
これは主への火によるささげ物である。

## 説教

レビ記は神さまを礼拝する具体的なあり方を詳細に規定します。

イスラエルにとって、

神さまと出会い、みことばを聞き、

神さまと交わりをする場所はシナイ山でしたが、

いつまでもそこにとどまっているわけにはいかず、

約束の地カナンを目指さねばならないイスラエルのために、

神さまは携帯用シナイ山として幕屋を造ることを指示なさいます。

そして、幕屋を通してご自身が彼らと共におられることをあらわされました。

それでは、神さまはどのように具体的にイスラエルと共におられたのでしょうか。

人はどのように神さまと交わりをすることができたのでしょうか。

どのようにして神さまに受けいられたのでしょうか。

神さまはどのようにして人にご自身を現されたのでしょうか。

どのように人を赦し、受け入れ、聖め、彼らにみことばを与えて、ご自身の栄光をあらわされたのでしょうか。

その具体的な内容を記したのがレビ記です。

私たちは、

神さまが私たちを愛しているとか、

罪を赦してくれた、祈りを聞いてくださる、祝福してくださる、と極めて単純に信じております。

でも、それは一体どういう意味なのでしょうか。

神さまが私たちを愛してくださるとはどういうことなのでしょうか。

レビ記は、神さまが具体的に私たちをどのように愛し、私たちの罪を贖い、赦してくださるのかを教えてくれるものです。

そして、そのように神さまに愛されている私たちが、

どのように神さまの恵みに応えて、神さまを愛していくべきか具体的に説明してくれているのがレビ記の内容なのです。

レビ記一章では、

奉献者の身代わりとなって血を流し、切り裂かれ、焼き尽くされる全焼のいけにえの儀式のことが定められます。

奉献者が、

その頭に手を置いて自らの手でいけにえを殺し、血を流し、切り刻んで、

切り刻んだ肉片を残らず火で焼き尽くす過程を通して、

本来は自分自身が神の怒りを身に受けて、このようにされて然るべきところを、

身代わりのいけにえによって助かったことを嫌と言うほど血生臭く実感しました。

そして、いけにえの代償の死に 100%全面的に依存する形で、

奉献者の罪は「贖われ」（原意は「覆う、視界から見えなくする」）ます。

神さまは、罪人が神さまに捧げたいけにえだけをご覧になって、

罪人を見ず、そうして、罪人へ下すさばきを思いとどまってくたさるのでした。

そして、続く二章では「穀物のささげ物」について定められます。

これは「全焼のいけにえ」に続いて神さまにささげられました。

その意味は、神さまの恵みにより、罪贖われ、生かされていることに対する感謝を表すことです。

「穀物のささげ物 **hxmi** ミンハー」は「贈り物」を意味します。

ヤコブがエサウに送った贈り物（創 32:13）、

ヤコブがエジプトのヨセフに送った贈り物（創 43:11）、

モアブ人からダビデに送られた贈り物（サムエル 8:2）、

それにカインとアベルが神さまにささげた「ささげ物」（創 4:4-5）が、「**hxmi** ミンハー」です。

相手が誰であれ、相手の栄誉と権威に敬意を払い、感謝し、服従と忠誠をあらわす「贈り物」がそれです。

つまり、

「穀物のささげ物」とは、

イスラエルの民を愛し、彼らの罪を贖い、滅びから救って、

さらには豊かな実りを与えて彼らを生かしてくださっている

神さまの恵みに感謝し、神さまへの服従と忠誠を告白する「贈り物」と言うことができます。

神さまがこの私の罪を贖ってくださった、

滅びから救い出してくださった、

のみならず、

神さまが日毎の糧を与えてこの私を生かしてくださっている、その喜びと感謝をもって神さまに「贈り物」をささげます。

そうして、

神さまがこの私を生かすためにくださっている

「いのちの糧」と言うべき「穀物」を神さまにささげて聖別し、

「食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光のために」生きていくことを告白します。

それが「穀物のささげ物」です。

ですから、告白という点から見ると、

イスラエルの民は、

「全焼のいけにえ」をささげることで

（恵みにより滅びを免れた）自分の全人生を神さまにささげることを告白し、

「穀物のささげ物」をささげることで、

さらに具体的に、自分の労働の実を聖別し、

「飲み食い」という人間にとって最も根本的かつ原始的な営みに至るまで聖別して、

現実に、実際に、具体的に神さまの栄光のために生きる、ということを告白したのでした。

どうして「穀物」なのでしょう。

古代社会はそのほとんどが農業に従事していたからです。

イスラエルも今は家畜を飼うことしかできなくても、約束の地カナンでの定住生活を夢見ていました。

「穀物」は当時の人々の労働の実を最も代表するものだったのです。

今日職業が多様化した時代にあって共通の収穫報酬と言えば、「金銭」がこれに当たるでしょう。

どのように調理するにせよ、「穀物」に「油（オリーブ油）」を混ぜた物が「ささげ物」と主体となります（1-7）。

これは、当時金持ちも貧乏人もすべての人が確実に持っているものであります。

どんなに貧しい人でも、「穀物」と「油」だけは持っていたのです。

それが無ければ、死にます。

「かめの粉」と「壺の油」は人々の生命線です。

かまどや平鍋、鍋を持っている人も持っていない人も、

とにかく生きています人なら、

（これを食べて現に生きているのだから）

例外なく「穀物のささげ物」をささげることができます。

とは言っても、「穀物」なら何でもよいというわけではありません。

神さまにささげるものですから、何でもよいというわけにはいきません。

条件があります。

まず、「小麦粉」でなければなりません（1）。

「小麦」は穀物のうち最上で最も高価でした。

誰でもささげることのできる「穀物」ですが、

しかしその中でも一番良い最上の物を神さまにささげなければなりません。

いいかげんな物ではいけません。

また、ささげ物にパン種を入れてはなりません。

パン種を入れると実際よりも大きく見えます。

でも中身はなく空洞です。

そんな見せかけの信仰ではなく、中身が大事です。

形だけ大きくても仕方ありません。

また、種なしパンにはイスラエルの忘れ難き思い出もあります。

そのパンを食べると、神の災いが過ぎ越して救われた、そして出エジプトして救われたという救いの恵みを思い出します。

また、ユダヤ人はパン種の発酵を腐敗と同様にみなしました。

勿論、普段は発酵したパンを食べましたが、

後に使徒パウロも解説するように、神さまにささげるパンは「パン種の入らない純粋なパン」でなければなりません。

同じ理由で、発酵を促進する「蜜（ぶどうから作られた濃いシロップ）」を入れることも禁じられました（11）。

そして、発酵腐敗を防止するための「塩」を入れるよう命じられます。

これは「神の契約の塩」（13）と呼ばれます。

神さまの恵みがいつまでも変わらないように、人の神への誠実も変わらないという告白です。

塩は焼いても残ります。

そのように、神さまの愛も変わることがないのだから、神への忠実も変わることがありませんと告白するのです。

神さまがこの私の罪を贖って下さった、

神さまがこの私を滅びから救い出して生かして下さい、この恵みは変わりません。

永遠に変わりません。

もし万が一にも、これが変わってしまったら、大変なことです。

神さまの愛とて不安定です。

人間の愛のように不安定です。

都合の良いときは愛するけれども、都合が悪くなったら愛さない、

恵みも下さらない、罪の贖いもストップ、中止で、日毎の糧を与えて生かして下さることもやめてしまおう、

そうになったら、大変です。

明日はどうなるかわかりません。

将来は不安、未来は暗いのです。

でも、神さまの愛は永遠です。

永遠に変わることがありません。

たとえ一時的に見捨てることがあったとしても、大きな目で見たら、永遠の次元では変わらないのです。

だから、身代わりのいけにえの死によって罪を贖ってくださったという恵みは永遠です。

神さまは、私たちに永遠のいのちを与えてくださったのです。

だから、私たちの神さまへの信仰、忠実、誠実も変わることがあってはなりません。

「塩を添えて」必ず「神の契約の塩」を添えて捧げねばなりません。

これが、神さまの恵みに応えることです。

これが変わることはない永遠の神さまの愛に応えて、私たちも神を愛することです。

私の罪を贖って、永遠のいのちを与えてくださった神さまの愛に応えることです。

それが、「穀物のいけにえ」をささげることです。

イスラエルの人々は、「穀物のいけにえ」をささげることで神さまへの愛をあらわしました。

捧げたものは、一部を火で焼かれて、残りは祭司のものになりました。

そして、(神に献身した)祭司の生活費に充てられ、神礼拝が維持されていったのです。

ささげ物を焼く際、共に煙にした「乳香」は神さまへの祈りです。

焼き尽くすいけにえは「記念(覚えさせる、思い出させる)」の部分と言われます。

神さまが立ち上る捧げ物をご覧になって、ご自身の契約を「思い出された」のです。

捧げたイスラエルの人々も、

「穀物のささげ物」を捧げるたびに、

神さまの永遠の契約を思い出しては感謝し、喜びと感謝をもって自らの忠誠を誓ったのでした。

今日、私たちにとっては、この「穀物のささげ物」は、要するに毎週礼拝で捧げている「献金」のことです。

それは、全焼のいけにえに感謝して捧げるものです。

キリストの身代わりにより罪贖われ救われた喜びと感謝をもって神さまに捧げるものです。

自分に与えられた恵みの中から、最善の、最上の物を、精一杯捧げます。

見せかけの物ではいけません。

心からの喜びと感謝の表れという、清い捧げ物でなければなりません。

ここに集うみなさん一人一人が、

キリストにより罪贖われた喜びと感謝をもって精一杯の捧げ物を捧げ、

捧げ物をもって神の栄光をあらわされるよう主の御名により祈ります。